



中村俊定文庫  
文庫 18  
5



北野  
天神御獨吟百韻御連歌

天神御獨吟



二條良基公點五内長二  
救濟法師点三十九内長二

賦何木連歌

紅く雪は花もし梅も花  
かきく不履む松中も夕景  
山風のお多し毎月も聯子て  
やうく静もく春は夜も



冬見ぬ月此夢に都や残らん  
旅れ志は遠しおろしき縁  
浪やう神よるおのちる川舟  
やうららるるやゆふへなる花露  
山陰れ志は遠しおろしき縁  
津のう木の花よりさきまのりぬる  
紫れ産はくちをえんとし  
雪乃かりて又やおろしき縁

行まきれ帰る夕をたむとあはれ  
をこころかこころをたむとあはれ  
舟路よまは波乃と月のよとく  
いていつれをたむとあはれ  
春をたむとあはれ  
麻をたむとあはれ  
松をたむとあはれ  
新や木の洞乃夕日まはる

むしつ雲中ふ山やかつら吹風又  
道又を宿れお殿いよも所  
花さうぬ草のまき葉やまら鏡  
朝露かすゆる雪一の夕人露  
うらましくは馬をよ現中よれて  
持る花んち地村も舟をい  
誰の袖と涙のあやかさら蘇  
やまらりーは女さつら路

楊ちらさ月と清もゆか庵あき  
まらー日まきつまて行路ん  
左歸乃名残もお殿いよも所  
月北東船は波まらーら雪  
川水や涙いこい路子氷さん  
底より又晴ーうき名れ高  
つらまらー下やまらぬおひま  
舟を切火れ清もまらーら

母のまはるの志は侍書より  
きつきたるぬ 松の舞おどく  
家内神と志は次子人  
出し一月よりうき雲れお  
奥山の中へ去る夜も  
甲斐といつていふぬは  
今朝は道へぬ野の  
うきをききしとて

三  
月には冬枯らすまはる  
涙の川やきつたひら  
夢まはると其のまはるに  
なきまはるといふぬ  
涙をまはるといふぬ  
里にまはるといふぬ  
まはるといふぬ

松あきばく霞の下らの風吹く  
山や楢と淵林とあらん  
谷はささやうは流るる川なるは  
雲かそらるるうはしれく夕雲  
うらら  
よとらしなまうに秋のまて  
るしこの下を神れうに落  
たのみるるうは世の中と成り  
おらある月の花れ山の磯

明はのらまわつて暮るしや  
をうらしうらうら一のつま  
舟の初沖津志波瀬はま  
かさるるらや遠くなるらん  
不二いら明らうらまら  
道しおとそと枝折とあら  
おら初そらま捨ておら  
たいらかかまらるる磯に





あしよその名を記す御つぎ  
山は妹背此中能川一浪  
なるしよの末まで水の流るん  
川をいよちよふ春は日影を  
着草一雨ふる無飲のよすえ  
やうぬ跡よふか松  
遠里といふあつやの二履  
夕の月や屋うへ入るん

深山まで時を待たせ宿を  
おまかりしよのあまのし  
つしよやんのかしらぬん  
今トそよ染めすきとすよか  
定るよの身とあまのしよ  
いふまゝのしよをいふん  
をよまといふ若り乃ある松の下  
黒きれ衣の佛なるよ

此懐紙或時二條殿と周阿  
法沙よりかき落るる言は  
才より點とてしめしめ  
二條殿周阿から信國阿  
方へとわりのとて  
をるる一は同持や  
なることと點とて  
三日めふすこと  
人として

北野の御寶殿か  
中後若意瑞相多  
神祕の事  
少難吳那との  
可信者や

右懐紙掛別依多宮天神社  
一帯相寺信僧正盛壽社  
求むる一はめく  
寫一止多く侍る利

明曆元年仲秋日

如意庵  
西順

天神御七歳の時御詠

う川うや紅も似る梅の花

阿古る顔も信常しく思はる

右之御百韻、如意庵西順老翁

写す之と書す

右之御獨吟百韻、至青木氏

之御百韻、弘新抄、中々

写す之者や

宝永八年三月十日

右之御獨吟百韻、若松氏  
浄宣抄、中々写す之者

享保六年霜月廿日 冬家

有清百韻連歌者肥後天草郡  
大夫野組上村大左衛門后藏六軒  
吉高標膳と云老令俳諧連歌  
好志之一年從肥前長崎の歌  
いひ九筋と云客信連歌  
書と持来所也標膳方物也  
運取有と云中物と書と  
初至二五年と云るは此書也  
二反事として清元抄婦又と

いひ約し歌おれし等語然  
彼客信と云は二反及又  
不ひ年と上生死と云來と名  
知今今標膳方有り  
市より上村禅林古城山  
遍照院相模國大住那  
善波村大雄山勝興寺の  
戒順味と云く西本通系の  
客信所より二五年迄留中  
標膳と戚友語也

又あつらひ神祓戒明抄ハ  
天満神をさる信有く享保一  
初年正月九日愚宅に金  
互ニ新春中なる儀を祈  
けりて戒明抄のいづく旨ハ  
天神御降誕の日なり  
倚く當郷 天満宮に今  
社参道すく藏六新に  
立寄大宰府飛梅中  
枝と刻る御堂像を拜見

くまの抄又廿一卷也  
尺せりくると字解  
いして信持本中り年願  
祝儀紙信二紙に  
是のひのく一息をや愚  
也も雖書字中再  
啼之と頼子はお頼  
他の笑讀と名願  
千次手弔又二巻也  
後人の辨見千強

此度中涼流沙忽見其  
跡苗二月年久為中寫  
進之山好首

蒲氏

享保十八年分五日 政成謹言

香山師

